

## 13【街の散策からの気づき発見】

## 春日部八幡神社と春日部重行

会員 K.T.

街の散策で春日部八幡神社にきている。街の風景を旅するだけでなく、この地の歴史に思いを馳せ、散策するようになってきた。

春日部八幡神社は鎌倉時代(1192～1333)の元弘年中(1331～1334)頃、春日部市の地頭、春日部重行が鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請し、創建したといわれている。元弘年中の時代は、『いい国つくろう鎌倉幕府』の末期になる。著名な軍記物語『太平記』の第1部「正中の変(1324)から元弘の乱(1331)」に描かれている動乱の時代になる。重行は、動乱の時代ゆえに安寧を願い、春日部八幡神社を創建したのかも知れない。

さて、『太平記』巻一には、このように記されている。  
「ここに、本朝人皇の始、神武天皇より九十五代の帝、ご醍醐天皇の御宇に当って、武臣相模守平高時といふ者あり。この時、上君の徳に叛き、下臣の礼を失ふ。これにより四海大いに乱れて一日もいまだ安からず。狼煙天をかすみ、鯨波地を動かすこと、今に至るまで四十余年、一人として春秋に富めることを得ず。万民手足をおくに所無し。(後略)」

## &lt;現代訳&gt;

「さて、本朝九十五代の後醍醐天皇時代、鎌倉幕府の執権は相模守北条高時であったが、このとき、上、天皇は君徳に背き、下の臣下は臣としての礼に欠けるという状況だったので国中は大きく乱れ、一日として安穏な日がなくなりました。戦いの烽火は天日を蔽い、関の聲が大地をゆるがして、今にいたるまで四十余年、当事者は安らかに命を長らえることができず。一般庶民も安心して手足をのばすところがないという有様が続いた。(後略) [新装版]現代語訳 日本の古典『太平記』 永井路子 学研 1990年12月」、とある。

元弘3年(1333)鎌倉幕府は滅亡し、時代は鎌倉時代から南北朝時代の動乱へと入っていく。重行は南朝の後醍醐天皇側につき、北朝の足利尊氏側と戦い、延元元年・建武3年(1336)頃、京都の戦いで敗死した。最勝院には、重行の子の家縄が遺骨を持ち帰り、葬ったと伝えられる塚が現在も残っている。

『なぜ?』と思う。最勝院の創建年代は不明ながら春日部市編『新編目録春日部市の歴史』には、「永正元年(1504)に慈恩寺(岩槻区)の僧侶裔尊が現春日部市に移り、「最勝院」と称した。」とある。『重行の時代と最勝院創建の時代には168年の差がある。この時間差は何故なのだろうか』、と思った。

遥か昔のことなので不明な事はあるも、著名な『太平記』の時代、南北朝の戦に参戦した武将が春日部にいたことは記録に残っている。春日部が古い歴史を積み重ねてきた地域であることを示すもので、誇らしいことと思う。春日部氏は歴史の中に消えてしまったが、春日部八幡神社は、新方領四十余郷の総鎮守として信仰を集め、今日まで、約700年の歴史を保っている。

余談ながら、八幡宮は九州の宇佐八幡宮に始まり、貞観二年(860)に京都岩清水八幡宮に勧進され、京都の守護神として祀られた。その後、清和源氏一族がこれを氏神としたことから、全国的に八幡神社が武人の守護神として勧進され、祀られるようになった。

さて、散策した春日部八幡神社であるが、現在、拝殿左側にある社務所が再建中だ。旧社務所は約百年前に建てられてものとのことで、老朽化が進んだため、今年、令和6年(2024)2月から再建工事が始り、進行している。年の瀬までには新社務所は完成するだろう。この新社務所が、また新しい時代を刻んでいく。旧社務所が建設された約百年前、1924年(大正13)は、どんな世相だったのだろうか、歴史年表を調べてみた。前年の1923年(大正12年)9月1日に関東大震災が起きている。マグネチュード M7.9 で大惨事となった。それから百年、大正・昭和・平成・令和と、戦争を含め、いろいろな時代を経てきた。新社務所のこれからの百年後、2124年までの時間は、どのような歴史を刻むのだろうか、動乱なく、安寧を願いたい、と思う。

